

『法隆寺』 日本人はどのように建造物をつくってきたか 1



これは、法隆寺の解体修理にあたった棟梁（西岡常一）建築史家（宮上茂隆）イラストレーター（穂積和夫）の三人が協力して、法隆寺がどのようにして建てられたかを解き明かした本です。これらの建造物を通して、古代日本人が持っていた技術や知識や知恵を知ってほしいといっています。

【聖徳太子と法隆寺】◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆  
仏教と儒教（中国の孔子の教え）にもとづいて十七条の憲法をつくり、政治をする貴族の態度を正そうとしました。斑鳩宮、斑鳩寺（中国式の名前が法隆寺）を建設し、太子が法華経などの經典の解説書を執筆しました。斑鳩寺は、西暦670年に炎上、その後、再建されました。

内部の壁に仏・菩薩の絵を描く（壁画は1949年焼損、1968年再現）。

屋根を支える組物に雲形の部材を使う。

**【金堂】** 础石・基壇のまわりに張る石は焼けた金堂跡のものを使いました。材のヒノキは近くの生駒山から手にいれました。直径最大二尺二寸（約66センチ）の柱をつくるためには、直径五尺（約1.5m）にちかい大木が必要でした。木の部分はほとんど朱色に塗り、垂木の先端は黄色、垂木と垂木の間に見える屋根板は白、連子窓は緑に塗りました。基壇の石の表面には、真黒の土マンガン土を塗って仕上げました。金堂は、朱、緑、黄、白、黒の五色に彩られました。天井板には文様を描いていて、格天井の、格子で見えなくなる部分にはたくさん落書きがありました。（右図のような落書きで230個も…）⇒⇒

**【塔】** 政府の援助が途絶え金堂ができてからしばらく見合せ、ヒノキは吉野から入手。焼失した塔より、ひとまわり小さく設計されました。バランスを考えて、金堂の高さのちょうど二倍、百尺（約30m）にしたようです。心柱にする柱は樹齢800～1000年の大木でした。礎石（心礎）は焼けた塔のものはひび割れていて、自然石を使用。心礎の下

**【宮上茂隆】** 法隆寺は太子信仰の中心のひとつとして、各時代に一度は大きな修理に恵まれてきました。鎌倉時代～豊臣秀頼による大修理～徳川幕府による大修理。それでも明治時代には、寺はかなり荒廃していました。文化国家の建設と道徳的な社会の確立という、聖徳太子のいだいた理想は、いまの私たちの理想でもあります。過去の人々がしてきたように、それを大切に守っていくのが、私たちのつとめでしょう。

**【穂積和夫】** 物の形や構造のなりたちを説明するイラスト仕事は、労の多いわりのはなかなか報われることの少ない地味な分野ですが、かえって表現意欲を掻き立てられました。あの壮麗な伽藍のたたずまいのなかに、なにか清新なおおらかさを感じました。私自身のなかに一種の太子信仰がいつのまにか根づいていたせいかもしれません。

【西岡常一】 法隆寺の昭和大修理は、昭和九年四月より同二十九年度末まで、二十年間にわたって行われました。古人の技量に、工法に、驚き感嘆しつつ過ごした二十年でした。日進月歩の現代、前を見るのに懸命で、足もとをしつかり見ることを忘れているのではないかでしょうか。いま一度、古いものを振り返り、見る者の胸に迫るなにものかをつかんで、しつかり足を踏みしめて、進歩の目標を間違わないようにしていただきたいものと思います。

【シリーズ全10巻】 ※現在、貸出可の本は法隆寺・桂離宮・ピラミッドです。

法隆寺・奈良の大仏・大阪城・江戸の町（上下）・巨大古墳・平城京・京都千二百年（上下）・桂離宮があります。

(この本の参考とされた本は、マコーレイ著の「ピラミッド」「カテドラル」他) (案内: 黒野晶大)